

## 人と地域をつなぐシニアネット

### ― 帯広と南紀熊野の活動から見る自立・自律する人々の 新たな連帯の形 ―

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院博士後期課程 藤田香久子  
北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授 鈴木 純一  
北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院博士後期課程 高橋 道子

20 世紀後半、情報機器が急速に社会に普及した時、遅れて登場したのがシニア世代であった。彼らの支援を目的に立ち上がった人々がいた。退職した、あるいは退職を間近に控えた ICT<sup>1</sup>技術者達である。彼らは老後のボランティア活動として地域に小さな ICT 普及のための講習会や教室を開く。ICT を教え、学ぶ人々のネットワークが組織的な活動となり、シニアネットとなった。今から 20 年足らず前のことであり、現在日本各地で展開しているシニアネットの歴史はまだ始まったばかりである。

シニアネットを立ち上げた人々の多くは ICT 企業の技術者だけでなく、様々な企業のシステム管理者、指導者で情報機器開発やシステム構築の最前線にいた者が多かった。当然のこと、彼らは既にパソコンについて高度なリテラシーは獲得していた。退職後、ICT が作るネットワーク性に注目し、地域や人々の生活に生かす活動は出来ないだろうかと考えた。実際に退職して地域で生活するに当たり、地域でのパソコン講座の他、シニア世代の社会参加の場を作り、彼らの自立と連帯を促す活動を開始した。さらには、活動の広がりと共に地域コミュニティのネットワーク構築を目指したのである。しかし、彼らの活動場所と考えた既存の町内会や自治会は停滞しているか形骸化していて、情報機器を取り込んだ新しい活動を受け入れる余地は少なかった。そして、行政が地域活動を管理運営し、町内会はその下請け機能をしか果たしていないように見えた。彼らがやりたいと思う活動は旧態依然の指示待ちの地域活動ではなく主体的な活動であり、そのような活動を許容し応援する地域へと変える、変えていくべきだと考えた。そして、無いのなら自ら作る、そんな社会的に元気なシニアが地域に登場したのである。

彼らの活動は同世代シニアのための ICT 教室開催となり、講師と受講生、卒業生たちが集ってシニアネットとなった。彼らの活動を通して見えてきたものは、ICT の普及を旗印に始めただけの活動がシニアのコミュニケーションの力でシニアを結び、地域を結ぶものとなってきたことだ。現在では、シニアの情報化だけではなく自立した生活を支援する活動を展開している。さらには町

---

<sup>1</sup> シニアネットの多くは情報技術 IT (Information Technology) を使用している。しかし本論文ではその当時の通称、本の題名等を除き、「情報」に加えて「コミュニケーション」(共同)性が具体的に表現される情報通信技術 ICT (Information & Communication Technology) を使用する。総務省の「IT 政策大綱」も 2005 年には「ICT 政策大綱」に改称されている

おこしにも積極的に参加するシニアの拠点となり、地域の活性化、再生にも大きな力を発揮している。

現在、日本各地に展開するシニアネットの活動を通して、地域に住むシニアが ICT によって社会とのつながりを確保し、その力で自分の生活を豊かにし、地域を豊かにしてきた状況を示していくことが本研究の目的である。

第 1 章では、シニアネット活動の概観を示す。近年、マスメディア等で紹介されシニアネットの認知度は高まってはいるが、その歴史、組織、構成、活動内容等の実態を示す報告は少ない。それ故、情報社会でのシニア市民が展開する活動を紹介することは意味あるものとする。次いで第 2 章では筆者が調査した 120 カ所のシニアネットのうち、北海道帯広市に拠点をもつ「とちかちシニアネット」に焦点を当て活動内容を示していく。広い十勝平野を舞台に会員達のネットワークが地域にどのような活力を与えているのかを呈示していきたい。次いで、和歌山県田辺市で活動する「つれもてネット南紀熊野」を取り上げる。熊野山中に限界集落を抱える和歌山県は地デジ化に合わせ、全県をあげて情報化に取り組んでいる。その中で、県や市と協働してシニアネットが過疎地の情報化の一翼を担っている状況を示していく。最終章では、オンラインのコミュニケーションを取り込みながらも地域で活動するシニアネットが展開するソーシャル・キャピタルの質の違いについて言及していく。そして、違いはあっても ICT のネットワーク性が結束型、橋渡し型のソーシャル・キャピタルを相互に融合する力を生み出しているのではないかと、さらには、地域の活性化にも ICT が極めて有効なツールであるのではないかとシニアネット活動で示すことが出来ると考えている。

## 第 I 章 情報化社会・高齢社会のシニア市民活動

### 1 節 シニアネットの歴史

シニアネットのモデルは 1987 年米国サンフランシスコから始まる。サンフランシスコ大学で教育工学を教えておいたメアリー・ファーロング教授は体力に限界があるシニアにこそ IT は必須の道具と考え、地域に住むシニアに IT リテラシー普及講座を開催した。そこから SeniorNet を立ち上げ、様々な IT 関連企業からの支援を受けて全米にその講習会を展開していった。現在では、活動範囲は米国に留まらず、世界各地に広がっている。

日本でも米国の動きに呼応する形で 1990 年半ばから大都市を中心に、IT リテラシー普及のためのボランティア活動が始まった。1994 年、東京目黒区の「いちえ会」、京都市の「金曜サロン」（リーダーの死去により現在は 2 団体に分かれて活動中）、金沢市に「シニアネット金沢」（現在は活動を停止中）、1995 年仙台市で「シニアのための市民ネットワーク仙台」を始め、「シニアネット久留米」、「シニア SOHO 支援三鷹」等の先駆的な活動が展開していった。

各地のシニアネット形成は 2000 年、国民 IT リテラシー普及が政府の e-Japan 構想により本格化した。2001 年 4 月、受講生 550 万人を対象に IT 基

礎技能講習会が実施された。この講習会には既にシニアネットを立ち上げていた東京、千葉、仙台、京都、広島、久留米ではシニアネット会員が講習スタッフとして参加した。しかし、講習会は期限付きであったし、講習会に参加した人々が十分な IT リテラシーを獲得するには至らないことが多かった。IT に関心があってもマニュアル通りの教習はシニアにとっては敷居が高く、講習内容だけではパソコンを使って何ができるのかを実感できないものもいた。また、基礎的に内容に飽き足らず更に高度な技術の習得を望むものもいた。このような状況の中でシニアネットに期待する人々がシニアネットに集うことになったのである。現在 120 あるシニアネットのうち半数以上の 67 カ所が 2000 年から 2003 年の 4 年間に誕生している。

情報技術の普及、機器の開発が大学や情報関連企業から始まったのを受けて、シニアネットも都市に集中していた。現在でも、ほとんどが東京近郊、そして地方中心都市に拠点を置いている<sup>2</sup>。北海道・東北地方で 22 カ所、関東地方で 53 カ所、中部地方が 14 カ所、近畿地方が 11 カ所、中国・四国地方で 9 カ所、九州・沖縄地方で 11 カ所となっている。関東圏に比べ 関西圏のシニアネット数はすくないが、「おおさかシニアネット」は米国 SeniorNet の組織性や活動内容、運営手法を踏襲し、大阪版 SeniorNet を形成し、会員数は 3 千人を越えている。

## 2 節 活動概観

前述のように、シニアネットのリーダーの多くは ICT 関連の技術者であったが、シニアネットに集まった人々は様々な経歴を持つ。共通点は ICT に関心があることだけであった。当初、講習会の講師は ICT リテラシーを既に持っていた人に限られていたが、受講者の中から講師となるものが出てきた。講習会に受講者として参加し、パソコン技術や知識を獲得して、次には講師となって新たな受講者の支援に回る。このような循環の中でシニアネットの活動が広がっていった。又講習会では、テキストに従い、決められた手順で技術を教えるのではなく、受講者のニーズや関心に合わせて学ぶ手立てが講じられていた。すなわち、そこは受講者の持つ知恵や経験を ICT で生かす手段を学ぶ場であったのである。多くのシニアネットが落ちこぼれゼロを謳うことを出来たのも一人一人に合わせたペースで進めた教授法にあるといえる。

教室は ICT リテラシー普及からさらに進んで、実際に ICT を使いネット活動を展開するものとなった。教室で学んだことを生産場面や経済活動につかう機会は退職後のシニアには少ない。メールもネット検索も家族や自分の興味や関心のみに向けられ、地域や見知らぬ人々との交流の機会が少なく、教室で学んだ広いネットワークを実感できない人々もいた。そのため、シニアネットでは、学習の結果を公開する手段としてホームページを立ち上げた。又、教室で

---

<sup>2</sup> 行政単位で見ると町村レベルでは 4 カ所しかなく、「ニセコ・しりべしシニアネット」以外は全て都市に隣接している。

学んだメールを実践するためのメーリング・リストを立ち上げ、お喋り、会話、コミュニケーション（時には口論まで）を結ぶコミュニティとしたのである。

ICT普及活動はほとんどゼロから始まったといってよい。有志が集まり、教室場所の確保や機器の調達に行政や地域の公民館、図書館や教育施設と交渉を重ねた。そして、地域企業、商工会、町内会、自治会にも協力を求めた。さらには、情報化推進を担当する行政教育機関だけでなく、福祉や介護を担当する施設、大学等にも支援を求めた。その上、地域メディア、新聞、テレビ、ラジオ、ミニコミ誌等に進んで登場し、シニアの参加を呼びかけたのである。そして、地域の小さなシニアのボランティア活動は参加する人々が持つそれぞれのネットワークをフルに利用して活動の広がりにつなげていった。すなわち、シニアネットの活動は、ICTの持つネットワークとシニアが培ってきた経験や人脈を地域コミュニティに展開してなされているのである。

シニアネット参加年齢は当初、男性では60歳代前半、女性では50～55歳代であったが、現在では男性の参加年齢は60歳代後半で女性は60歳代前半となっている。参加最年少は20歳代で学生のボランティアで最高齢は90歳を超えている。シニアネットでは年齢制限をしている所は少ないが50歳代から70歳代までの年齢層が大勢を占めている。男性の参加年齢が高いのは退職後に第二の職場を持つ人が多いことと、男性の出不精に由来するのではないかとあるシニアネットの関係者がいていた。女性のICTリテラシーは、参加当初は男性に比べ低くかったものの、習得能力には差がなく、学習意欲も高く、講習修了後、今度は講師となって活躍するものが多い。組織の運営や管理部門は男性が多く占めていて、筆者が調べたシニアネットのうち、会長の性別が分かった118カ所では107人が男性、10人が女性で三人体制は1カ所であった。シニアネットの会員数は50人未満が39カ所、100人未満が28カ所、200人未満が22カ所で500人以上が4カ所（内おおさかシニアネットが3000人を超えている）であり、全体では17,000人となっている。会員以外にも友好会員や賛助会員もいて20,000人以上がシニアネット活動に関わっている。

地域に展開する他のシニア活動と比べ規模はまだ大きいとはいえないが、町内会や自治会の役員として広報活動を担当している人や電子町内会を立ち上げに力を発揮している所もあり、活動範囲は広いといえる。参加費用は半数の61カ所が年会費3000円以下で、24カ所では4000円から6000円となり、経済的負担が低く抑えられている。活動の多くがボランティアで、活動拠点や講習会場も行政のICT関連施設や地域の公民館を利用しているため使用料が安いこと、事務管理や連絡がパソコン一台で済むこと等により抑えられることによる。

組織形態を見ると、活動開始時は任意団体として発足したものが多いが、現在ではNPO法人が56カ所、任意の市民活動は64カ所となっている。NPO法人格を取得したシニアネットの多くは、会独自の活動には法人格はそれ程必要にならないが、行政や地域企業と協同して事業をする時には一種の身分保証となり、責任の所在が明確になるという。また、公的な責任を負うことで、活

動に対する意識も真剣なものになったというリーダーも多い。そして、会員の中にはその種の知識や経験を持つものが多く、手続き等の事務は難しくないとしていた。NPO の意義を理解しているものの、提出書類や会則整備等の煩雑さを理由に法人格を取得しない所もあるし、自分たちの興味や関心を追求するには組織的な整合性を必要としないとする所もある。

### 3 節 活動内容

ここまで、シニアネットが「いつ」、「どこで」、「誰が」、「どのような」活動をしてきたが、シニアネットが ICT を学ぶ活動であること以外には言及していなかった。しかしながら、更なるシニアネット理解のためには、シニアネットの様々な活動形態を示し、ICT の潜在力が活動の中で発揮されてきたかを示す必要がある。

日本各地に展開するシニアネットは、設立当初から ICT 講習やその普及に努めてきた。しかし、シニアネットは当初の ICT リテラシー獲得の場から、シニアの交流、シニアライフの充実、生活環境の見直し、地域活動参加の動機付けの場となり、ICT のネットワーク性、自在性を発揮してきた。活動内容を大きく分けると、第 1 に「ICT を知る」活動で、第 2 に「ICT でつなぐ」活動、第 3 に「ICT を使う」活動となる。

「ICT を知る」活動は、地域のシニアを含めた人々に ICT を教え学ぶことで ICT の普及を目指し、地域情報化と情報格差の解消に努めるものである。ICT が社会に汎用され、日常生活に浸透する一方、今なお十分な ICT リテラシーを得られないシニアも多いため、講習会の需要は大きい。特に、元気な 70 歳代の学習意欲は盛んで、学習内容は次第高度になっている。また、現在では ICT 機器の進化は急激に進行しているので、より高度な多機能機器を使いこなすための講習会となってきた。そして、参加するシニアの ICT 技能は 10 年前とは比較にならないほど高くなってきたといえる。受講者や講座内容は多岐に渡る。老人大学から介護施設での出張講座、さらには、障害者の ICT 講習、地域に住む若年の就労希望者へのワード、エクセルから会計事務やキャド等のソフトの習熟にまで範囲が広がっている。講習会の広がりや、テキストや指導過程の適切さ、低価格の授業料だけでなく、受講生のニーズに真正面から取り組み、受講生と共にその不足をいかに埋めるかを考えていく、このようなシニアネットの姿勢がシニアを含めた地域住民に評価されていることを物語っている。また、シニアネットの講習会を支援してきた行政や企業、他の市民団体との協働事業はシニアからの主体的な参画でなされ、その評価がプラスであることを示しているのである。

第二の「つなぐ活動」は「ICT でシニアをつなぐ」、「ICT で記憶、伝統、文化をつなぐ」活動に分けられる。前者は講習会で学んだ ICT リテラシーを持って参加したシニアをつなぐ活動である。見知らぬ同士であっても、ICT に興味や関心があるという緩やかな関係は対面での交流の場、オフ会に発展する。オフ会はまさにシニアのクラブ活動となり、スポーツから登山、カラオケ、趣

味の会、食事会、健康・文化講演会等様々な場がシニアに提供される。人との付き合いが希薄となったと嘆くシニアのために格好のおしゃべりの場、遊びの場が生まれる。そして、オンの活動としてメーリング・リストでの交流も盛んになる。日々の生活で感じたこと、溜め息、悩みごとから自分のホームページやブログの紹介等々、ささやかなメールであっても自分のメールボックスに届くことは嬉しい。この小さな喜びから自分が社会とつながっていることを実感する。ICTを学ぶ機会が人と人をつなぐきっかけとなったのである。

後者の「ICTで記憶、伝統、文化をつなぐ」活動は、「シニアをつなぐ」活動の延長上にある。ICTを習得した後、デジタル美術館、地域に残る遺跡、文化財等のアーカイブを立ち上げ、自分たちの知を結集し、編集し、画像処理して情報発信する。さらには、時代の語り部として民話や遊び、地域行事の来歴を紹介したり、自分たちの少年少女時代の記憶に残る戦争体験を語り継ぐ活動をしたりしている。又、「シニアネットひろしま」では、原爆体験を記憶し、語り継ぐために、全世界から「灯籠流し」に向けたメールを受け付ける。それぞれのメールのある思いを毎年8月6日にネットで配信すると共に灯籠に貼って流すのである。戦争体験を風化させないこと、戦争の悲惨さを次代に伝えることがシニアの責任であるとリーダーは語っていた。又、地域に文化や景観をデジタル化して地域活性化の一助にしようと頑張っているシニアネットもある。「シニアネット久留米」では地域に残る先人たちの足跡を残すアーカイブを自分たちのホームページに立ち上げた。「e ネットリアス」では三陸海岸の景観や伝統文化をCD-ROMに集めたものが図書館資料、小・中学校の教材、観光案内として活用されている。古都鎌倉の「ICP 鎌倉地域振興協会」では鎌倉の文化遺産登録推進のための資料デジタル化に参加している。

ICTで自らの記憶、地域の文化、伝統をつなぐことは単なる記録ではない。そこに生きた人々が何を考え、思ったのかを伝えることである。地域の文化を発掘し、評価することは自分たちとの距離を縮める。そして、それらを再構成した自分たちを次世代につなぐのである。ICTを学ぶことはまさに世代を超えてつながることを教えている。

「使う」活動はコミュニティ・ビジネスとしてSOHO (Small Office & Home Office の略) のプラットフォームを形成するシニアネットの他に、ICTを使いながら、シニアの生活に取り込んでいく活動がある。「シニアSOHO三鷹」(以下「SOHO三鷹」と省略)は、元気なシニアの働き場所を提供するためSOHOシステムのプラットフォームとして、コミュニティ・ビジネスを支援し推進している。具体的には第一に、地域に住むシニアの小規模で主体的な経済活動を行うためにSOHOへの理解を深め、起業へのノウハウの共有、経営のための自己開発と仲間作りのネットワークを広げる。そして、第二に、行政、企業、教育団体、NPOを含む市民活動等との協業の情報を集積するプラットフォームとして、協業の仕組みを立ち上げる。個人が新たに地域で起業しようとしても、自分達の得意とする業務分野や技術水準をアピールする場も、市場からのニーズを聞き取る場も少ない。そして、企業での経験や熟練した技術が地域の

信頼を得るには時間が掛かる。「SOHO 三鷹」は SOHO を希望するシニアのプラットフォームとなり、市場とのマッチング・ビジネスを活動の中心に位置付けている。さらには、「税金を払う NPO」として三鷹市を拠点に東京都下のシニア SOHO と活動や経営のノウハウを共有するネットワークを展開している

地域行政との関連でいえば、三鷹市の第三セクター「株式会社三鷹」の主要なメンバーとして、地域情報化を推進している。その活動は、地域のシニアや教育機関だけでなく、地域にある民間企業の ICT 普及に尽力するだけでなく、ICT を使ってシニア・ハロー・ワークを開きシニアの就業のための情報を提供するまでに至っている。さらには、地域小学校の見守り隊等の人材派遣やシニアの孤立を防ぎ、健やかに暮らす手立てを提供するセミナーまで開催している。

「SOHO 三鷹」の創始者でもあり、現在代表理事を務める堀池喜一郎氏は、「地域の課題を市民、行政、企業で探り合い解決するコミュニティ事業では、ネットワークのプロデュース（あるいはジェネレート）する役割と、地域に分散するスキル人材を結びつけるコネクターの役割」が求められるとし、「それがあって仕事が創出できる。」<sup>3</sup>と語る。シニアに「新しい働き方とサービスと収入」がもたらせるならば、地域活性化の一助となると提案し、そして実践している。

「使う」活動のもう一つの形、「ICT を生活化する」活動はコミュニティ・ビジネス活動であるのだが、ボランティア活動の側面も強く持つ。地域に住むシニアの生活に直接入り込んだ活動を展開する。パソコンの自宅講習をする中で見えてきた生活上のニーズ（電球の取替えから買い物、庭木の剪定）に応えたり、自分が地域に住むことで見いだした課題の解決（公園の管理や地域清掃）に取り組んだりしている。さらには、成人後見人制度、遺産相続や遺言書の相談窓口紹介、防災や防犯活動、血圧管理システムや介護施設の紹介等、様々なシニアの生活で起きるトラブルに情報を提供し、その手立てとして ICT リテラシーの普及を図る活動も行われている。そして、孫との会話から小学校の放課後活動支援（不得意教科の個別指導の他、礼儀作法、囲碁・将棋、農業体験）にも手を広げている。また、「おおさかシニアネット」は、米国のシニアネットの日本版展開を目指し、オンライン・ショッピングにまつわるシニアの悩みを解消しつつ、情報化時代の利便性をシニア生活に広げる活動を積極的に行っている。

ネット情報を生活の中で安心して使う活動は、「働ける、まだ働きたい」と願うシニアと「情報を安全な形で生活に取り込みたい」とするシニア世代を結ぶものである。対価は求めるがそれは純粹に経済活動から得た収入というより、社会活動での利他的な行為から発生した報酬であり、金額以上に「地域に貢献している」実感が活動を支えているとシニアネットの一人は語っていた。このような「ICT を生活化する」活動として、筆者が注目しているのが、和歌山県

<sup>3</sup> 堀池喜一郎「団塊の世代の定年とシニアネット シニア NPO の役割」『シニア SOHO による地域活性化方策に関する調査報告書』2007 財) 広域関東産業活性化センター p iii

田辺市の「つれもてねっと」である。次章で、「つなぐ」活動として「とがちシニアネット」と共に詳しく紹介していくが、両ネットだけでなく、日本各地でシニアが ICT をもって様々な活動を地域に起こしていることは、情報化が単にネット上の活動に終始するものではなく、ネット情報が生活や地域と結ぶ活動であることを意味すると考えている。

## 第Ⅱ章「とがちシニアネット」と「つれもてネット南紀熊野」

本章では筆者がホームページ、実地調査等で知りえた 120 のシニアネットのうち、地理的条件が全く違う二つのシニアネットを取り上げる。「とがちシニアネット」は北海道十勝平野の中心都市、帯広で誕生した。一方、「つれもてネット南紀熊野」は、熊野大社のある熊野の山々と太平洋に囲まれた和歌山県田辺市で生まれた。広々とした大地と山間に過ごす人では歴史、風土、習慣も違うし、活動内容も大きく異なるが、情報化への熱意は同じものがある。これら二つのシニアネットに注目して、シニアが地域で活動することの意味を提示していきたい。

### 1 節「とがちシニアネット」

「パソコンを使って、第二の人生を楽しく」をモットーに、中高年にインターネットで交流する会を立ち上げ、平成 13 年 7 月、36 名の会員で発足したのが「とがちシニアネット」である。平成 15 年 7 月には NPO 法人格を取得した。9 年後の平成 22 年では 221 名の会員数で累計会員は 500 名を超えている。発足当時、現在も代表を務める高橋克司代表の思いが地元誌「十勝毎日新聞」に取り上げられた。とすぐにシニア市民からの問い合わせが殺到したという。彼自身、在職中からパソコンを使い、その受発信の自在性やネットワーク性に習熟していた。そして、会社顧問を続ける傍ら、シニア世代にパソコン指導し、ネットの利便性を教える「シニア生活アドバイザー」（経済産業省の外郭団体が認証）の資格を取得していた。その資格取得と目指していた仲間たちと情報交流する中で、全国各地ですでにシニアネットが立ち上がっていることを知る。自分も自分の住む帯広でシニアネット活動が出来ないだろうか、高齢化時代、情報化時代といわれる今、シニアが地域で生き生きと生活するためにパソコンは極めて有効な手段ではないか、その普及活動が出来ないだろうかと考えたそうである。仕事柄、交友範囲が広く、帯広市内の企業経営者の応援もあった。また、時は国を挙げての「ICT 基礎講習会」が開催されていたこともあり、活動は多くの賛同者と共にスムーズに始まった。特に活動開始当初の二年間、街中活性化事業として認められ、活動拠点の提供があったり、地元 CATV 社からのネット回線の無償提供があったり、又、前に述べた「十勝毎日新聞」という地元新聞社での記事の取り上げで地域認知度が高まったという。具体的な支援は既に終了したが、自前での活動は着実に進展している。この十年間には様々なトラブルに遭遇したのではないかと思われるが、今は市内中心部に活動拠点

を設け、最新のパソコン機器を導入し、ICTリテラシー普及と同時に「人の輪」、「情報の輪」を広げてきている。

その活動の中心は、シニアの活性化であり、地域の活性化である。すなわちシニアが情報化することによって帯広市、商工会議所との連携、協働を進める社会貢献活動である。シニアのパソコン教室がメインではあるが、その他に、シルバー人材センターや町商工会議所に講師を派遣し、町内会パソコン講座聾啞者や障害者に対する講座も行って来た。そして、帯広市市民活動交流センターとの連携による地域住民のためのパソコン無料体験講座を定期的で開催し、既に多くの人々が受講している。

教室ではパソコンに親しみ、パソコンの機能を自分の生活で使うことに重点を置く。また、「教える人」と「学ぶ人」との距離が近い教室環境は、メーリング・リスト参加に積極的な姿勢を生み出し、オフの付き合いも盛んになった。様々なオンとオフとの交流は孤立しがちなシニアに新たな出会いの場を提供し、シニアの生活を賑やかで温かなものとしたのである。オフ会はシニアの興味・関心に特化したもので、パークゴルフ、ゴルフ、卓球、山登り、俳句会、映画鑑賞、麻雀会、おしるこの会まである。そこで見たこと、聞いたことをメーリング・リストで報告したり、ホームページで公開したりしている。

そして、活動は外への回路を開く。商工会議所や商店街のイベントに参画し、「とち花街道フェア in おびひろ」など、街中の花壇整備にボランティアで参加したり、その情報を広く発信したりと活躍の場を広げている。さらには、中心市街地活性化協議会のメンバーとなり町の賑わい作りにも貢献する。さらには「市民活動交流センター」運営協議会の運営・企画に参画し、ホームページ作成やその後のメンテナンスをしている他、月二回のパソコン相談会を開催し、市民からの相談に当たっている。

会費は年1万2千円と比較的高いが、月額千円でいつでも施設設備が使える、そして、PCに関する小さな質問に答えてくれる場所は探すことが難しく、決して高くないとの会員の声が多数であった。平成21年は346講座が開催され約3200名が参加していた。

パソコンリテラシーの獲得した結果はシニアライフを豊かにする。離れて住む家族との繋がりを容易にしたりするだけでなく、ICTに挑戦することで生活に充実感が得られ、趣味を共有したり、作品展示で温かい評価を受けたりする。さらには、地域に長い間住んではいても見知らぬ人々との交流が生まれた。また、再度の就労を希望するシニアにとってもICTリテラシー獲得は有利に働く。ICT講座での和やかな応答の中で他人が知人となり、友人となるには時間が掛からなかった。ICTを学ぶことから人とのつながり形成となったのである。

そのつながりが「とちシニアネット」の特徴となり、それは帯広を超え日本各地までも広がっている。ここでは、HPで公開している「次代への語り部」と「何か探し隊が行く！」を見ていく。

「次代への語り部」は、会員の一人がメーリング・リストに自分の第二次世界大戦中に出合った体験を載せたことに始まる。東京空襲の時、陸軍病院に勤務していて民間人の救

護に当たった体験談である。それに触発され、樺太での抑留生活や帯広空襲での記憶を蘇らせたメールが回覧されて、会員達の関心を集めた。その後、このような戦争の忌まわしい経験を二度と繰り返さないために、その後のメールを含めてホームページから発信したのである。自分だけの戦争経験が「次世代への語り部」という形で発信されたことで、戦争を知らない世代を含め全国から様々な世代の応答があったという。

語る場が身近にあること、聞いて応えてくれる仲間がいること、さらにはその仲間が世代を超えた人々までにつながることで、このようなネット環境を「とかちシニアネット」がシニアにもたらしてきたのだ。文学者でも歴史家でもジャーナリストでもない市井の人々が語る辛い戦争の記憶はネットを介することでその封印を解いたといえる。このような試みはアメリカのSeniorNetや日本各地のシニアネットのホームページでも見ることが出来る。「古い」を語ることはその人の生き方や時代を語ることである。戦争の無残さや愚かしさを体験した者がその思いを語り伝えることがシニアネット活動の重要な役割の一つかも知れない。

さらに、「何か探し隊が行く」も学びの成果を発信している。有志が十勝地方にある旬な情報を自分達の足で集め、デジカメ映像と言葉で伝える。地元の一寸した情報、知っているようで知らない場所の紹介、例えば、お祭りや町の自慢、暮らしの中の役立つ情報、地域の農場、大学、工場等を訪問しての感想や随筆が満載である。月に二回、会員が順に担当して取材し、写真を写し、記事を書く。スキルアップの機会であり、作品発表の絶好の場となっている。

また、ある高齢者専用施設からは入居者に一人が一週間の食事の内容が発信していた。パソコンを持って施設に入居することはこれまではほとんどなかった。そこからの発信は個人の小さな領域でのみ巡っていたが、ネットにアップされることによってそこでの生活が社会に明らかとなる。どのように毎日をすごしているのかを具体的に知ることによって、これからのライフスタイル選択の重要な視点を提供するものとなる。さらには、問題点やその改善への議論が起こりうる。そして、何よりも発信者は受信者でもあるので、メールやホームページを介してより広い世界をもたらすことになる。社会から孤立しがちな人々に情報によって社会とつながる実感の提供がなされるのである。このような発信とそれに対する応答の機会、長い老後における生活の質の向上に寄与するものとなるであろう。

身近な生活にある情報はあまりに日常的で情報であるとは意識されないことが多い。しかし、一度、発信されると世界中に届く。そしてアップした内容に応答がある。懐かしい、楽しそう、十勝平野は広い、美味しそう等の感想が見知らぬ人々から寄せられ、自分の発信が一方ではなく、双方向であり、つながりが循環していく。すなわち、情報の輪が広がり、温かな血の通う人の輪となっていくのである。

ネットで「つながる」ことは単に直線的なつながりではない。送信者や受信者がつながりのノードとなり、縦横に広がるネットワークを形成するのである。パソコンを学ぶことはまさにつながりの広がりと同時に深める契機となることであるといえる。高橋代表は発足当時「シニアの経験と技術、それぞれの得意分野を地域に生かしていきたい」と語っていたが、現在では、その活動が参加する一人一人の人生が地域に生かされ、主体的な個人となり、その集まりがつながりの力を作り上げてきたのである。

高齢者がパソコン技術を習得することは若者に比べ時間がかかるかも知れない。しかし、

習得能力には差はない。学ぶ仲間と学ぶ手立てがあるならば容易となる。学び、そして教えるという循環は「とかちシニアネット」の10年の活動の中で培われてきた。そして、パソコンは単なる通信の道具ではない。人の自立を助け、自立した人を連帯へと導く道具、すなわち「コンヴィヴィアリティ自立共生的な道具」<sup>4</sup>となっているのである。

## 2節「つれもてネット南紀熊野」

2003年、少子高齢化、過疎化、高度情報化が進行する中で、地域住民はどのような貢献をすることができるかを模索して立ち上げたのが和歌山県田辺市に生まれた「つれもてネット南紀熊野（以下「つれもてネット」と省略）」である。活動当初、和歌山県内だけでなく、大阪、東京などの遠隔地との地域交流で情報を共有することから始めた。代表の千品氏はネットであればこそ遠隔地との交流は容易であると同時に外からの情報は地域を開く力となると考えたという。翌年にNPO法人として登記し、本格的な活動に乗り出し、都会からはICT周辺技術を、地域からは地域文化（お祭りや物産等の情報）を発信という双方のニーズに対応する交流促進に努めてきた。その中で都会に住む人々が自然と共生できる場を提供しながら、地域住民にとっては南紀熊野地方を開かれた「すみか」としていくことを目指してきた。

新しいすみかの発見は都会人だけでなく、地域に住む人々にとっても重要である。地域にある「ゆとり」や「やすらぎ」に対し新たな視点で評価が加えられることは、地域に住む人々が自分の地域を見直す契機ともなるのである。たとえば、観光についても、単にビジネスと捉え、都会の人々に頼る非自立的な活動であってはならない。厳しい山村集落の生活にある「生き方」、「知恵」、「技」を自ら発信することで主体的な取り組みへと変化させるのである。田舎に住む若者が自分達の良さを意識するなら地域に残る良さを伝承する動機付けとなりうる。そのためにはコミュニティの良さが現代的に解釈される必要がある。その際、力を発揮したのがICTであった。「つれもてネット」では、「田舎」の豊かさ、温かさを可視化して観光情報とし、そのネットワークをつなぐことに大きな関心を持っている。それ故、ICTを既に獲得している若者だけではなく、行政の支援も受けながら、地域の人々全てを巻き込む活動を展開しようとしている。

「つれもてネット」はICTを普及する場を地域に提供する。そこはICTリテラシーを教えるだけでなくICTを介して地域の人々が集まる場であることも目的とする。だから、テレビ、ゲーム機、パソコン、テレビ電話等と言う現代の情報機器をおもちゃとして楽しむこともある出会いの場を作るのである。旧来からあるコミュニティの温かさ、触れあいをコミュニティに復活させるのである。但し、新しい形での復活である。参加に拘束力のない気軽に出かける場となるように仕組むのである。

平成21年10月から「つれもてネット」は和歌山県、田辺市より「ふれあいサロン」経

---

<sup>4</sup> シニアネットの多くがイリッチのいうコンヴィヴィアリティ自立共生的な道具としてICTを考えている。彼は、「自分のかわりに働いてくれる道具ではなく、自分と共に働いてくれる新しい道具」、すなわち、自立共生的な道具の必要を説いた。『コンヴィヴィアリティのための道具』p16

更にイリッチはコンヴィヴィアリティの道具とは、「おのれの想像力の結果として環境を豊かなものにする最大の機会を与える」と語る（前述書p39）。シニアネットではまさにICTを生活の具体的支援の道具としていた。

営という情報化事業の一部門を受託されている。「ふれあいサロン」は市民センターやコミュニティセンター、地域連絡所、行政局ロビーに開設され、大画面テレビやゲーム機を設置し、体と頭を使い、ICT の便利さを共有する場となっている。そして、「手ならいサロン」では実際にパソコンにふれ、ワードで文字入力、お絵かきソフト、画像ソフトを使って「ちょっとだけ」ICT の利便性を体験する。インターネットで情報を仕入れたり、メール交換の初歩を学んだり教えたりして、世代や地域の距離を縮める機会とする。そこは子供たちからシニア世代まで集うことを可能にしている。

「つれもてネット」は三十人足らずの小さなシニアネットである。シニアを呼称に入れていないが、シニアの情報化を推進するニューメディア開発協会で「シニア情報アドバイザー」に資格を持つ会員が多く、退職後に在職中に獲得した ICT リテラシーを地域ボランティア活動の中で発揮しようとする。そのため、地域に長年住み続けた人、退職後故郷に戻ってきた人、終の棲家を熊野山中に求めた人など多彩な顔ぶれが並んでいる。

コミュニティ作りには「官」との協働が鍵となる。単なる「官」の手伝いではなく、コミュニティのあり方を共に考えることから始める。自分達の要望を取りまとめ行政に施策をお願いするのではなく、地域のニーズに対し自分達の出来ることは何かを問うことから始める。そして、これまでの勤務先、経歴ではなく、そこで培ってきた知識、技術、人脈を活用して事業計画をたて、実施に向けて行政に協働を呼びかける。言い換えれば、今、何が出来るかを、何をしたいかを集めて地域の困難解消の手立てを提案し、事業の担い手となるのである。そのためのノウハウを県域以外にある先進的なボランティア団体から情報を得ながら、地域に相応しい独自の活動形態を生み出してきた。前述の「ICT 情報交流サロン」開設はその活動の一端である。

田辺市は近年、龍神、中辺路、大塔、本宮地区と市町村合併した。過疎化と高齢化が市の大きな課題である。そして、地上デジタル放送への移行に伴う情報インフラ整備にも尽力しなければならない。このような環境の中で、「つれもてネット」は地域情報化とシニアの情報化を同時に推進する活動を和歌山県と田辺市に提案し、それが「和歌山県シニアの ICT 活用による地域活性化モデル補助事業」として採択されたのが平成 21 年のことである。熊野の山間を流れる川に沿って集落のある 4 地区（竜神、中辺路、三川（大塔）、本宮）の行政施設のロビーを情報コーナーとし、そこへ「つれもてネット」のメンバーが世話役、講師として参加する。施設、設備は行政が受け持ち、運営を「つれもてネット」の会員が受け持つのである。

活動の評価は月一回、両者の協議会で話し合われる。月によって、参加者が少ないこともある。これは「サロン」が地域に必要とされていないのではなく、地域の住民の生活時間が「サロン」の開催日と合致していないとの指摘は鋭い。山間部のシニアは農作業の段取りや天候によって時間配分する。農繁期は早朝から夜遅くまで作業が続き、雨の日に休む、まさに晴耕雨読の生活で、曜日や時間に拘束されている都会人とは違うのである。だから、彼らの時間に合わせた「サロン」開催が必要という意見も出てくる。地域住民密着の姿勢は行政の対応だけでは十分ではない、柔軟に応じる「つれもてネット」の存在意義があるといえる。

地域にあるテレビ、パソコン販売店は販売や修理には対応しているが、それを使う、活用することまでに眼が向いていない。地デジ対応テレビは番組を視聴する機能だけでなく、

双方向発信の機能をもち、さらにはパソコンの接続も極めて容易となる。これを使えば山間部でも情報網が整備できる。そして、そこに住む多くのシニアに情報を享受する環境を提供するために「サロン」を作り、ICTに親しむこと、楽しむことをから始めたのである。

「ICTを教える」よりもまず「ICTに親しむ」ことを重視する姿勢は、ICTアレルギーを持つ地域の住民に受け入れられた。そして、ICTに触れることからICTで何が出来るのかに興味を持つことまでには時間がかからない。今では、テレビにパソコンをつなぎ、全国の人と将棋を楽しんだり、経営する食堂のメニューを自分で作ったり、家族でデジカメ写真を「撮る人」、「編集する人」、「印刷するひと」と分業しながらアルバム作りする家族も出てきた。ビジネスマンの必需品としての認識しかなかった名刺でさえも、リタイアした人や主婦達がそれぞれユニークな肩書きをつけて登場し、自分発見の道具となった。印刷所や現像所も遠い山間部ではパソコンの周辺機器も利便性と共に楽しさももたらす。また、ホームページやブログで梅干作りや木工作品を紹介した時、多くの人からの応答を得て、自分のささやかな手仕事の価値を見いだした人もいる。また、「ぎおんさんの夜見世」（家ごとに、昔話などを題材にして野菜や生活用品を使って手作りした作品を軒先に飾り、道行く人々に見せる大湯神社の夏祭り）の様子を発信する。家族に残る文化がデジタル化されて、子供達に、そして、地域に伝わるのである。「なんだ、こんな風を使うのか」と知ってもらうことが重要なのだと「つれもてネット」では考えたのだ。これまで情報に対し受信者であった人々が発信者になることによって自尊の意識と伝わることの意味を知る機会となったのである。

ICTを情報として受発信する他に、ワイワイおしゃべりしながらWiiで体を動かしたり、ゲームをしたりして「ひだまり」で時間を過ごす。このような活動が「ICT情報交流サロン」であり、山間部に住む人々にICTを体感する喜びをもたらした。さらにいえば、「新しい学びの形」、「新しい人とのつながり」だけでなく、「新しい地域の価値」を見いだす契機としている。ささやかであっても地域の活性化は住む人の思いからうまれると信じているのである。

「つれもてネット」では平成22年度の活動として、竜神地区の「ICT情報交流サロン」で「ネットスーパー」を利用する社会実験も開始されている。「買い物難民」と呼ばれる山間の過疎地で、ネットで住民と商店を結ぶ取り組みである。ネット販売は近年の流通事情でも注目され、年間売り上げ、参加者、取引件数も急速に増加している。しかし、過疎地のシニアのICTリテラシー獲得は遅れていてそのサービスを楽しむことが出来なかった。サロンへ気軽に出かけ、そこでネットスーパーにアクセスするならばもはや「難民」でいることはない。パソコンが現代の御用聞きとなる。その住民の手助けを「つれもてネット」会員がするのである。又、龍神地区サロンの出先も4カ所に増え、情報リテラシー普及にも貢献すると同時に情報難民、買い物難民のシニアをサポートしている。このような試みは過疎地に生きる人々を情報で支援するという具体的例であるといえる。

平成22年度、「つれもてネット」では、行政に対し「情報交流サロン」の更なる発展的利用を目指し「ワンストップサービス」事業を提案している。山村に住む住民の生活支援の新たな形をICTで提供するものである。暮らしにある様々なニーズやイベント、例えば、引越し、出産などの生活環境の変化に伴うサービス提供、日常生活支援サービス提供（教育、医療、介護、交通、防災等）の手続きをICT活用して一カ所で可能とするという。地

域に特化した生活支援に役立つ情報を「情報交流サロン」の場を生かして「ワンストップサービス」を運営していく。協働事業の効果としては、第一に多様化する住民ニーズに迅速に対応できること、第二に社会事業分野での新しい雇用の創出が見込まれること、第三に行政コストの軽減を挙げている。

今までの住民サービスは行政が中心となって地域住民の苦情や要望を取りまとめることから始めることが多かった。しかし、行政の財政状況が逼迫して、丁寧な情報収集やサービス提供をしたくても出来ない状況が生まれている。納税や住民票交付、健康保険や介護保険等オンラインで結び、低コストでありながら迅速な事務処理は望まれてはいるが、住民の ICT リテラシーを必要とする。だが、山間部に住むシニア住民に習得機会を提供することは難しい。そこを補完するのが地域のボランティア活動であり、NPO なのである。彼らは過疎地の住民の足となって買い物に行き、手となって事務手続きを代書するサービスを考えたのである。

三川大塔地区では「情報サロン」がきっかけで、平成 22 年 7 月、田辺市内に大塔のアンテナショップが開いた。山間部から市街地に住むことの多くなった元三川大塔村出身者は村との絆を全く断ち切ったわけではない。山里の住んだ空気の中で育った野菜や昔ながらの手作り食品はいまなお記憶に残る。週に一度であっても産地直送の品々を田辺市で販売する企画は、現在田辺市内に住居を構える人々からの大塔地区への応援でもあり、彼らの懐かしい故郷を再確認させるものとなった。さらには、産直店に集まる人々からの温かい評価を得て、大塔地区に住む人々は地域の良さを意識する契機となった。この企画は都会から I ターンした「つれもてネット」会員の発案から生まれた。大塔地区に講師として「情報サロン」に通う男性会員の一人が住民と交流する中で、そこで収穫された産物の新鮮さ、美味しさを知る。そして、その味を多くの人に知ってもらいたい、また、故郷を離れて暮らす人々に思い出の味を再度味わってもらいたいと願って、地域や個人が持つネットワークをつなぎ、田辺市の商店街の一角に「三川夢来人の館」が開店したのである。

和歌山県は工業用地や農耕作地に適した平地は既に限界まで活用されている。更なる工場誘致や開墾の余地は困難であるという。人口減少や高齢化にも歯止めがかからない状況は続いている。さらには、山間部では過疎化が進み、高齢者だけが取り残されるという深刻な限界集落の問題を抱えている。このような環境の中で、いかに地域を活性化することは重要であってもその方策を立てることは難しい。その中で、「つれもてネット」は小さな NPO ではあるが、ICT を通じて市民の側からの状況打開の提案を行ってきたといえる。

ICT リテラシーの普及に始まり、それによって可能となったネットワーク作りで行政と住民を結び、生活の質の向上、維持を支援する。山間部に住む多くのシニアに情報につながる意味を自分達の生活に直結させる。ICT を教えるだけではない。ICT を楽しむ、ICT で交流の場を作る、自分と地域を、世界をつなぎ、このような情報社会の過ごし方を提供する。パソコンにアクセス出来ない人には作業を代行する、買い物難民にはパソコンを持って御用聞きをするのである。つなぐという ICT の可能性を単に情報伝達に留めるのではなく、生活に直接的につなげる手立てを考えてきたのである。住民の横に立ってニーズを見い出しながら、ICT で解決できることはないかと試行錯誤を重ねてきた。それは行政や地域住民に対し何が出来るのかを模索するシニア市民の活動であった。

和歌山県も田辺市も彼らの活動にある協働提案の斬新さと実行への機動力を高く評価し

ている。情報化推進は行政主導で行われているが、それを受け入れる社会のあり方は重要である。上からだけでなく横からの支援があれば、情報がより身近なものとなる。「つれもてネット」の活動は自分達の経験、知識、技術を再度発揮する場となっただけでなく、時間を自由に使うことが出来るシニアであることの強みを発揮したものといえるのではないだろうか。

### 第三章 ICTの力

#### —シニアネット活動とソーシャル・キャピタルとの関係性—

シニアネットは経済的活動から一步退いた人々が ICT を取り込んで行う地域活動である。既存の町内会、自治会、老人クラブ等と同じようにシニアネットは移動可能な地域に拠点を置き、対面の活動を重視する。すなわち、地域に「行く場所、会う人、すること」を作り出す。また、シニアネットが ICT に興味や関心がある人々の集まりと考えるならば、カルチャーセンターに集まるサークル活動であるともいえる。

しかし、ICT リテラシー獲得と普及を目指す活動は今まであったシニアの社会活動とも文化サークルとも違う性格を有している。彼らは ICT への興味と関心から集まるので、シニアネット活動の内容は ICT のネットワーク性によって自由自在に展開する。ICT リテラシーを地域に普及するという方向は共通して持っているが、参加者のニーズに合わせ、可変的に動くのである。20年足らずのシニアネット史において、創設時の理念は継続しながらも、「ICTを知る」活動は機器自体の進展や情報環境の変化に合わせ、より高度な内容へと変化した。パソコンにアクセスできない高齢者に対しては、より丁寧な対応が求められるし、時には代替する活動へも発展している。ICT を「知る」活動からさらに広がり、「つなぐ」「生かす」活動への進展は会員や地域住民、行政、地元企業を巻き込んで行われている。シニアネット内部の交流の暖かさ、親密さを醸成しながら、外の風を捉えようとする姿勢がこのような活動の柔軟性を活動にもたらした。ICT が持つコミュニケーションの発進力、ネットワーク性、テーマに応じた可変性、情報の集積性が緩やかながらも効果的にいかされ、活動内容の多様化及び参加者の主体的な取り組みに寄与していることが確認されるといえる。

まさにシニアにとって、パソコンは単なる情報受発信の機能だけでなく、人をつなぎ、地域をつなぎ、社会へとつなぐ道具となったのである。シニアネットの多くは会員達をオンラインでつなぐメーリング・リストを持ち、なおかつ、ホームページで自分達の活動状況を内外に発信している。ともすれば閉鎖的で自足的な既存のシニア活動とは違う社会参加の形を呈し、情報化社会に呼応するものとなっている。地域での講習会やサークル活動（オフ会）等の顔と顔が向き合う活動だけでなく、メーリング・リストやブログ等でのオンラインでの言葉の付き合いはシニアの交友範囲を広げ、社会参加の機会を提供した。言葉と文字での二重のコミュニケーション空間はシニアのお茶の間となり、お喋りの機会を増やし、その中で得た情報を自分の生活に活用する楽しさを提供する。

メーリング・リストは会員達の多くが参加することで単なる会の連絡手段以上のものになっていく。いわば、それは会員達の生の声が話され聞かれるコミュニケーション空間へ

と変わる。自分のメールに付き合いの浅い人からも応答があり、その連鎖が起きる。メールの応答がシニアにとって新鮮な経験となり、違う世界観にふれるというコミュニケーションを体感させるものとなる。この濃密なコミュニケーションの中で、教室で言葉を交わす講師と受講者たちが何でも話せる友人となるのには時間がかからなかった。ICT リテラシーの質や量には違いはあっても、それらはその人の持つ属性の一つに過ぎない。オフとオンの二重のコミュニケーションはこれまでの人との付き合いにあった垣根を低くし、気軽に言葉を交わすことを可能にしたのである。

シニアにとって、今まで培ってきた生活習慣や友人関係を急に変えることは難しい。新しいことに挑戦するにも勇気が必要である。それ故、文字であっても言葉であってもお喋りする機会が増えることは楽しくもあり、驚きの連続となった。孤立しがちなシニアにとって社会との縁を結ぶという情報縁がシニアネットの性格を形成したのである。

会の広報あるいは連絡手段と想定したホームページを WWW にアップした際、様々な分野から活動内容の問い合わせや協働の提案等が殺到したこともあった。そして、このことはネット情報の伝播の速さと広がりや会員達に実感させるものとなっていく。地域の行政や企業、シニア活動に関心を持つ人々からの接触はオンライン故に容易となり、その結果、ホームページの読者層から活動への参加者が増え、さらには新たな協働が始まった。地域参加を模索していたシニアネット自身にとっても、このネットワークの広がりや活動の広がりにつながり、社会参加への意欲を高めるものとなったのである。

現在、シニアネットの多くが自らの活動を地域全体に広げ、「まちづくり」に参画し、地域の ICT 化だけでなく環境整備、地域教育、SOHO 起業によるコミュニティ・ビジネスへと乗り出している。さらには、その活動領域は世代を超え、範囲を大きく広げ、人と人、人と地域、人と社会を結ぶネットワークをもたらし、ICT のネットワーク性、公開性、双方向性、多方向性がシニア活動の新たな領域を開いたのである。「とかちシニアネット」と「つれもてネット」活動はまさにその具体例といえるのではないか。

ICT がもたらすオンライン・コミュニティはとかく現実と遊離した仮想空間として見なされることが多い。その仮想空間は触覚的、近視眼的要素を持つと大澤真幸は語る。彼はインターネット上で実現するのは間接度の高いコミュニケーションであっても、当事者にとっては直接性の高い、ほとんど触覚的なコミュニケーションの場となっているとしている<sup>5</sup>。一方で、若林幹夫はネット上のコミュニケーションは仮想の「もう一つの現実」や「光学的な『虚像』」を示すものだけではないという。情報技術によって音声、映像、文字が「いま・ここ」にないものをスクリーン上に虚像として結ぶものでありながら、「それらが社会生活の中で共有された実際上の環境を構成する」ものとし、「社会的な事実性をもつ」と論じている<sup>6</sup>。さらに、情報化やメディア社会化とは、「それ以前の社会にとって代わる何かを生み出すのではなく、それ以前の社会に対し新たな行為や関係の領域を付加して、新しい領域と古い領域との間の関係の場を作り出す」<sup>7</sup>としている。

それ故、インターネットはコミュニティのコミュニケーションを循環させ、地域コミュニティに新たな地域性と共同性を付与することを可能とする。コミュニケーションを重ね

<sup>5</sup> 大澤真幸『メディア空間の変容と多文化社会』pp54-55 及び『不可能性の時代』p181

<sup>6</sup> 若林幹夫『〈時と場〉の変容』p173

<sup>7</sup> 同上 p213

ながら、生活者のネットワークが形成され、地域に住む人々が持つ自発性と主体性、さらには連帯感を醸成するのである。自らの興味や関心から自発的に集まったものでありながら、個々人が相互に依存しあうことで、コミュニケーションが広がっていく。言い換えれば、シンボリックな結びつきは社会関係資本（信頼、互酬性、知識・情報の共有）を形成し、資源提供の動機付けを強化するのである。それ故、宮田加久子は、ネットでの交流が一般化された互酬性の期待、愛着や関与、他者への共感的関心、アイデンティティの表出、自己効力感（環境に何らかの効果）、自己目的的な動機付けをも生み出すとしている<sup>8</sup>。

社会関係資本の重要性を喚起したパットナムは、著書『孤独なボウリング』<sup>9</sup>の中で、市民による社会参加とコミュニティを接続する社会的ネットワーク、そこから生まれる一般互酬性、信頼性の規範、相互義務と行為への責任を取り上げ、豊かな市民社会、コミュニティの資源とした。しかし、現在、家族、友人、職場でのインフォーマルな接触の低下や市民活動参加者の減少が起こり、コミュニティが崩壊したとする。しかしながら、彼は社会的ネットワークの持つ信頼と互酬性が望ましい結果となることを信じ、その再生を期待している。インターネットのネットワーク性についてパットナムは懐疑的な姿勢を取っているが、地域のコンピュータ・コミュニケーションにアクセスが容易な住民が増えるならば、その新しいツールは対面のつながりを補完し強化する可能性を指摘している<sup>10</sup>。

シニアネットは引きこもるためにオンラインを使うのではない。自分と人と社会をつなぐための手段として使うのである。まさに若林やパットナムが語るように社会的な事実性の上に新たな行為領域、新たな関係性を作り出しているのである。そして、宮田が論じるようにオンラインのコミュニケーションはシニアネットでも社会関係資本の形成、蓄積にも貢献している。帯広ではオンラインの交流がオフでの付き合いに発展する。介護施設で「お絵かきソフト」の講師をしている一人に別の団体から支援提供を仲介したり、パソコントラブル解消の手立てを教えたり、不要なパソコン用品を必要な人に回したり、日常的に互酬的行為がなされることになる。オンとオフの交流は社会関係資本を二重の回路で発展させているのである。又、「つれもてネット」代表、千品氏は祖先が培ってきた地域住民との信頼関係があってこそ活動することが出来たと語っていた。今の自分の活動が受け入れたのは地域にあるボンディング型（結束型）の社会関係資本であるという。しかし、それだけでは日本社会に残る閉塞的なものになる。新しい風を受け入れるためにこそ ICT リテラシー普及は必要であると考えたそうである。古き良き伝統、文化、習慣、信頼関係と共にそれらを世界に発信して新たな関係性の構築をはかる。いわばボンディング型（結束型）とブリッジング型（橋渡し型）の融合である。

シニアネットが従来からあるシニアの社会活動とは性格を異にすると前に述べた。ICT を活動の中心にあることはシニアのコミュニケーションによるコミュニティを形成したのである。生活者の視点が明確になることにより、参加者の問題意識の顕在化、課題発見が容易になる。自らの体験に基づいた意見が集約され、コミュニケーションが活性化してコミュニティが生まれるのである。このコミュニティは嘗て地域共同体にあった協働性や連帯感を持つが、それは強制された一体性ではなく、自発性、主体性と特徴とし、地域求心

<sup>8</sup> 宮田加久子『きずなをつなぐメディア』p84

<sup>9</sup> ロバート・パットナム『孤独なボウリング 米国コミュニティの崩壊と再生』

<sup>10</sup> 同上 p509

力を増進する。新たなコミュニティの一体性、親密性を醸成し、他者への配慮と関心が拡大する。その結果、地域にある共通善、コミュニティの規範や文化、伝統の価値が評価され、再構成する、そして継承する機運となったのである。

日本各地で活動するシニアネットは新しいツールを自立共生の道具とし、隣人との対面でのつながりを強化することに成功したと考える。参加者の自立、自律がなされ、参加者の連帯の力が生まれた。これがシニアと地域の活性化を導いたといえる。活動にある ICT が有機的な働き、ネットワーク性、一般互酬性、信頼の構築に寄与したのである。ICT を学ぶ地域活動は集まる人々と地域をつなぐ。ICT の潜在力が顕在化した実例がシニアネット活動であるといえるのではないか。

シニアネットの歴史はまだ始まったばかりで活動の展開は流動的である。しかし、シニア世代の孤立や孤独が喧伝される時代、社会とのつながりはこれまで以上に必要とされる。すなわち、人々のつながりはシニアの自立・自律した生活を支援するものであり、連帯する力を形成する。ささやかなシニア市民活動であってもシニアネット活動に存在するダイナミズムが超高齢化社会日本に求められている。本論で取り上げた「とちぎシニアネット」や「つれもてネット南紀熊野」以外の全てのシニアネットにおいてもシニアと社会の関係やコミュニティのつながりを ICT で結んでいるのである。

参考文献

- 井上俊他編 1997 岩波講座 現代社会学『成熟と老いの社会学』第13巻 岩波書店  
岩波書店編集部編 1999『定年後』岩波書店  
上野千鶴子 1994『近代家族の成立と終焉』岩波書店  
—— 2005『老いる準備 介護することされること』学陽書房  
大澤真幸 1999「電子メディアの共同体」『メディア空間の変容と多文化社会』青弓社  
—— 2008『不可能性の時代』岩波新書 1122 岩波書店  
金子郁容 1992『ボランティア もうひとつの情報社会』岩波書店  
—— 2002『新版 コミュニティ・ソリューション』岩波新書 235 岩波書店  
広井良典 2000『定常型社会 新しい「豊かさ」の構想』岩波新書 733 岩波書店  
—— 2009『コミュニティを問いなおす—つながり・都市・日本社会の未来』ちくま新書 800 筑摩書房  
古瀬幸広、廣瀬克哉 1996『インターネットが変える社会』岩波新書 432 岩波書店  
堀池喜一郎 2007「団塊の世代の定年とシニアネット シニア NPO の役割」『シニア SOHO による地域活性化方策に関する調査報告書』財)広域関東産業活性化センター  
丸田一 2007『ウェブが創る新しい郷土 地域情報化のすすめ』講談社現代新書 1873 講談社  
—— 2008『「場所」論 ウェブのリアリズム、地域のロマンチズム』NTT 出版  
宮田加久子 2005『きずなをつなぐメディア』NTT 出版  
宮田加久子、野沢慎司(編著) 2008『オンライン化する日常生活』文化書房博文社  
村井純 1995『インターネット』岩波新書 416 岩波書店  
—— 1998『インターネットⅡ』岩波新書 571 岩波書店  
山田肇(編) 2009『シニアよ、IT をもって地域にもどろう』NTT 出版  
横石知二 2007『そうだ、葉っぱを売ろう!』ソフトバンク クリエイティブ  
若林幹夫 2010『〈時と場〉の変容』NTT 出版  
イリッチ・イヴァン 1973(渡辺京二訳 1989)『コンヴィヴィアリティのための道具』日本エディタースクール出版部  
ロバート・パットナム 2002(柴内康文訳 2006)『孤独なボウリング 米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房  
Furlong, M & Lipson S.B., 1989 “An Electronic Community for Older Adults: The SeniorNet Network”  
*Journal of Communication* 39(3) American Communication Association pp145-152  
——1996 “Young@heart: Computing for Seniors” McGraw-Hill  
MacDonald, Barbara with Cynthia Rich 1983 “Look Me in the Eye: Old Women, Aging and Agism”  
Spinsters Ink, Minneapolis MN  
Wellman, B., & Haythornwhaite, C., ed. 2002 “The Internet in Everyday Life” Blackwell Publishing  
Wellman, B., 2005 “Community: From Neighborhood to Network” *Communications of the ACM* Vol.48  
No. 10 The ACM Digital Library pp54-55  
参考 URL  
SeniorNet <http://www.seniornet.org/>  
ThirdAge.com <http://www.thirdage.com/>